

新しい学問と教育

1 / 1

古墳

飛鳥

奈良

平安

鎌倉

室町

安土桃山

江戸

明治

今日の問い

江戸時代の中ごろから、どのような学問や教育が広がっただろう。

読み終えたら、最後の「問いへの答え」を見る前に、自分の言葉で答えてみよう。

1 国学と蘭学

新しい学問

もとおりのりなが
本居宣長

「古事記伝」を書いて国学を大成した。

すぎたげんばく
杉田玄白

前野良沢らと「解体新書」を出版した医者。

いのうただたか
伊能忠敬

全国を歩いて測量し、正確な日本地図をつくった。

古事記や万葉集などの古典を研究し、仏教や儒教が伝わる前の日本人の考え方を明らかにしようとする**国学**がおこった。**本居宣長**は「古事記伝」を書いて国学を大成した。国学は天皇を尊ぶ考えと結びつき、のちに幕末の尊王攘夷運動に影響を与えた。

吉宗がキリスト教に関係のない洋書の輸入を認めたことから、オランダ語で西洋の学問を学ぶ**蘭学**がさかんになった。医者**の杉田玄白**や前野良沢らは、オランダ語の解剖書を苦心して翻訳し、1774年に「**解体新書**」を出版した。これにより、人体のしくみを正確に知ることができるようになった。

蘭学は、地図づくりにも生かされた。**伊能忠敬**は50歳で江戸に出て天文学や測量を学び、55歳から約17年かけて全国の海岸線などを歩いて測量した。測量はやがて幕府の事業として行われ、その成果をもとに、忠敬の死後、実際の形にきわめて近い日本地図が完成した。

2 寺子屋と藩校

教育の広がり

てらこや
寺子屋

町や村で、庶民の子どもに読み・書き・そろばんを教えた所。

はんこう
藩校

藩が武士の子どもを教育するためにつくった学校。

商業が発達すると、文字を読み書きし、計算する力が庶民にも必要になった。そのため町や村には**寺子屋**が開かれ、子どもたちが**読み・書き・そろばん**など、くらしや仕事に役立つことを学んだ。往来物とよばれる教科書が使われ、教えたのは僧や武士、医者、町人などだった。寺子屋は江戸時代の後半に全国で急にふえた。

諸藩は、藩の政治を担う人材を育てるため**藩校**をつくり、武士の子どもに**儒学**や武芸を学ばせた。会津藩の日新館や長州藩(萩藩)の明倫館などが知られ、蘭学や医学を教える藩校も現れた。寺子屋や藩校で学んだ人々が多かったことは、明治時代に近代化を進める土台にもなった。

学校	学んだ人	おもな内容
寺子屋	町や村の庶民の子ども	読み・書き・そろばん
藩校	武士の子ども	儒学・武芸

問いへの答え

江戸時代の中ごろから、古典を研究して日本古来の考え方を明らかにしようとする国学や、オランダ語で西洋の学問を学ぶ蘭学がおこり、本居宣長の「古事記伝」や杉田玄白らの「解体新書」が生まれた。教育も広がり、庶民の子どもは寺子屋で読み・書き・そろばんを、武士の子どもは藩校で儒学などを学んだ。

次は ノート で、下線に語句を書きながら確かめよう →

